

岩倉使節団における山田顕義
-渡正元との邂逅を手がかりに-

竹本知行

はじめに

山田顕義は明治4年から約2年間岩倉使節団に理事官として参加したが、彼ら理事官は、帰国後に海外視察の成果報告書を提出することになっていた。理事官によってその提出時期はまちまちであるものの、山田の報告書は、帰国後早々に、明治6年の段階で提出されたものと考えられている¹。また、それはどのような経緯かは不明ながら『建白書』（発行・馬喰町二丁目、英蘭堂 嶋村利助）という和綴じの小冊子として発行され、世に知られることとなった。

この『建白書』は、山田の軍隊観について検討する際、しばしば引用される史料である。また、その内容が当時まさに実行されようとしていた徴兵令を一旦延期するべきであるとの主張を含んでいたため、その政治的インパクトの大きさから、『建白書』はその文脈においてのみ論じられることが多かった²。たしかに、山田の『建白書』は、文明論の立場から、社会的・文化的見地に立った徴兵令の延期論であった点は重要である。それは『学問のすゝめ』で「日本には唯政府ありて、未だ国民あらず」³と、当時の日本の開化状況を表現した福澤諭吉の視点とも通底するものであり、その意味は決して小さくはない。また、山田は、大村益次郎の衣鉢を第一に次ぐものとして政府内部とりわけ兵部の官衙⁴における存在感は大きなものがあり、さらに、山田はヨーロッパ視察から帰朝したばかりの新知识の持ち主だったため、その言説は徴兵令制定の中心人物であった山県にとって大きな衝撃であったに違いない。まさに「山県の兵制に対して三斗の冷水を浴せかけたものだ」⁵だったといつてよい。

本稿では、山田の『建白書』に表れた彼の思想と、それを形成した岩倉使節団での見聞について、山田に少なからざる影響を与えたと考えられる欧州、就中フランスでの随員との関わりについて検証するものである。

その随員とは名を渡正元（六之助）という。渡は、旧広島藩士で天保10年の生まれ。旧姓は田中氏であり、のち絶家であった渡家を再興した。維新後、外国官・会計官に出仕したが、明治2年イギリスに留学した後、翌年フランスに渡った。このとき彼はたまたま渡欧中であった山県有朋や西郷従道らと同宿となり語り合っている。そして普仏戦争が起こると、彼はパリ籠城に加わり見聞を広めた⁶。山田に同道した明治5・6年は、渡が34・35歳の時であり、山田は29・30歳であった。山田は渡の案内でヨーロッパの何を見たのであろうか。

山田顕義『建白書』の論点

『建白書』の内容は巻頭数行の緒言に列挙されている。すなわち次の如くである。

- (一) 各国ノ兵制
- (二) 編隊則並ニ徴兵ノ制
- (三) 下士官及ビ上士官
- (四) 器械火薬
- (五) 軍医並ニ會計
- (六) 鎮台
- (七) 陸軍省
- (八) 目今我国ニ於テ急施ヲ要スル諸条件

これらの項目中、第八項は更に七つの細目に分けて論じており、紙幅も前七項の約二倍に当たる。全体としてみれば、欧州視察の成果報告が前七項で、第八項はそれを受けての持論の披瀝という形である。『建白書』に現れた欧州での見聞の跡をたどるために、前半の一部を抜粋する。

兵何ヲ以テ国家ニ至要ナルヤ。兵ハ凶器ナリ、而シテ能ク巨万ノ金額ヲ費シ人民ヲ勞シ少壯ノ事業ヲ妨ケ其學問ヲ礙シ其性ヲ障害シ其才ヲ束縛シ其刑罰ヲ嚴酷ニシ、或ハ又醜業ニ慣習シ蜜陰ヲ盛ニシ梅毒ヲ繁殖ス。(中略) 然ラハ則国家人民ノ上ニ於テ損害アル而已ニテ其至要ナル所以何処ニアルヤ。其益タル帝室ヲ守衛シ邦土ヲ保護シ人民ヲ安全ニスルニ過キス。其帝室ヲ守衛シ人民ヲ安全ニスルノ具、国ニ法アリ律アリ、教育ノ道アリ、其他政府百般ノ要務アリ、何ソ兵力ヲ要スルニ足ラン。夫レ人ノ人タル其性ヤ善、政府之ヲ誘フニ善良ノ道ヲ以テシ之ニ処スルニ至公ノ法ヲ以テン之ヲ懲ラスニ方正ノ律ヲ以テス、内民決テ不良ヲ計ルヘカラス外人何ソ無理ヲ論スヘケンヤ。兵ハ対敵抵抗ノ器ナリ、至公ノ理ニ依リ至善ノ道ヲ蹈ム、何ソ抵抗ノ器ヲ要ンヤ。茲ニ二人アリ議論ヲ生ス、議中一人突然劍ヲ拔テ立タハ他ノ一人亦忽チ劍ヲ拔キ立テ之ニ応スヘシ、之レ人情自然ノ然ラシムル処ニシテ他人ノ決テ抑制スル能ハサル者ナリ。今政府劍ヲ拔テ内民ニ対シ外人ニ接セハ、内民外人亦応ニ劍ヲ拔テ之ニ応スヘシ、政府至公至正ノ法律ニ標準シ万機ヲ張弛セハ、内外人民何ソ拔劍シテ之ニ対スベケン。然則今日文明ノ世ニ於テ無用ナル者ハ兵歟。不然、兵ハ抵抗ノ器ナリ、抵抗ハ人ノ性ナリ、人抵抗ノ氣アレハ武勇ナカルヘカラス又軍事ナカルヘカラス、人生欠クヘカラサル者ハ文武ナリ、国亦然リ。何ソ夫レ然ルヤ。今世ノ人未タ其理ノ至公至正ナルヲ知ル能ハス。於是至公至正ノ道ヲ蹈ムヘカラサル者アリ、政府是ナリ。然トイヘトモ政府ノ事法アリ律アリ能ク之ヲ權衡シ又能ク之ヲ節度ス、故ニ政府ノ法人能ク之ヲ規トシ政府ノ律人能ク之

ニ準スルノ際決シテ兵ニ用アル事ナシ。然レトモ我国境ヲ出ル咫尺、人決シテ我国法ヲ以テ法トナスヘカラス律ヲ以テ律トナスヘカラス、万国ノ公法モ亦時アツテ照準トナスヘカラサル者アリ。此時ニ当リ誰カ能ク之ヲ断決ス、兵ニ非ラスンハ決シテ之ヲ断スヘカラス。夫レ法ト律トハ決シテ人ノ適意ナル者ナラス、常ニ人意ヲ抑制スル者ニシテ人間不便ノ具ナリ、故ニ人其抑制不便ノ苦ヲ脱セント欲スル素ヨリ其自然ナリ。人々能其法律ノ国家ニ存在スル所以ヲ識得セハ則チ至公至正ノ理ヲ知ルナリ。然ラハ則法律モ無用ナリ兵モ亦無用ナリ。然レトモ法律ノ人間ニ存在ヲ要スルノ際決シテ欠クヘカラサル者ハ兵ナリ、法律決シテ欠クヘカラス文武決シテ廃スヘカラス。故ニ兵者其国体ト法律ニ依リ其権衡ヲ適宜ニシ設置スヘキ者ナリ。然ラハ則我国体ト法律ヲ知り、各国古今ノ兵政ヲ斟酌シ、其利害損益ヲ比較シ、我国人民上ニ於テ其利益ノ在ル所以ヲ知り、而後之ヲ設置セスンハアルヘカラス。於是コレヲ見レハ兵者独り戦時ノ用ノミナラス実ニ治平ノ重器ナリ。

(中略)

徴兵ノ法第一国体第二会計第三自他ノ国況第四当時ノ用兵術ニ関ス。之ヲ賦役スルノ法自カラ異同アリト雖トモ之ニ司令スルノ文意大差異アル事ナシ。人民ノ其土ニ生ル者ハ貴賤ノ別ナク必ラス皆兵役ニ服シ、各其国権ヲ保護シ而又其身所有ノ権ヲ固守シ決シテ他人ノ輕侮侵奪ヲ受クヘカラサルヲ以テス。人民能ク其理ヲ了解シ而後以テ徴集スヘシ。然リト雖トモ此兵ヲ徴スルヤ、啻ニ容貌ヲ強兵ニ模擬シ隊伍ニ編シ銃砲ヲ採リ敵前ニ進マシムル而已ヲ以テ本務トスヘカラス、人民一般ノ知識敵兵ニ超越スルヲ以テ最要トス。於是国民中貴賤貧富ノ別ナク幼稚ノ時ヨリ郷校ニ於テ普通学ヲ教ヘ兼テ採器訓練ヲ演ハシム（普瑞両国古来有此法、仏墺魯伊太利近年此法ニ嚮フ、人民必服ノ兵役ヲ金錢ニテ売買スル者ハ欧州昔日ノ弊ナリ）。是レ人民ヲシテ各自文武ノ道決シテ偏ナルヘカラサルヲ知ラシメ、此土ニ生スル者ハ相共ニ此国権ヲ保護シ而テ又各自所有ノ権ヲ固守シ決シテ他人ヲシテ侵奪セシムヘカラサルノ理ヲ講究スルナリ。故ニ強兵ノ基ハ採銃運動スルニアラス、国民一般都鄙ノ別ナク郷校ノ教育ヲ充分ニシ普ク人民ノ知識ヲシテ甲乙ナカシムルニ在リ。教育ノ道如此、兵以テ徴スヘシ。兵ヲ徴シ營ニ入ル、人已ニ普通ノ学問アリ、而テ又普通武事ヲ知ル。於是士官下士官ニ従属シ軍事特別必用ノ数件ヲ学ヒ得ル而已。故ニ人各其身務ムヘキノ道慎ムヘキノ理ヲ知り、滞營日久シキ時ト雖トモ其弊害ヲ生スル事鮮ク、此兵彼兵ニ較スレハ其優劣豈ニ霄壤ノミナランヤ。故ニ兵ヲ徴スニ方テハ必ス先ス良下士官ヲ育成セスンハアルヘカラス。⁷

『建白書』においてまず目を引くのが、「兵何ヲ以テ国家ニ至要ナルヤ。兵ハ

凶器ナリ」という言葉である。『尉繚子』の「武議」の言葉を引用しつつ「兵は凶器なり」と位置づけた山田の軍隊観がそこに集約されている。しかし、山田は国家人民の上に損害をもたらすものであると断言した後、世界は必ずしも道理を守った善良の交際がまかり通らないものであり、「抵抗の器」としての軍備を持つ必要があると現実主義の見方を示すのである。もっとも、山田の「万国の公法も亦時あつて照準となすべからざる者あり」といった国際認識は当時の政治指導者に共通して見られる。しかし彼は、陸軍建設においてはみだりに列強の制度を模するのではなく、国力を比較考量した上で慎重に実行しなければ、ついにその事業は失敗に終わると警告している。そこから、軍備は当今、「国内の警備に充るを以て限とすべし」という認識が示されているのである。このあたりの山田の論を見ると、大村益次郎の論、すなわち「一時に二つながら全くすると云ふ事は、容易に出来るものではない、或は攻める力がなければ、守る力もないと云ふけれども、私はさうは思はぬ、故に先づ陸軍の力を第一にして、海軍の方を後にすると云ふ訳は、陸軍を先きにして置けば、自分の国内を守ることが出来る、外へ攻めて往かなければ、自分の内を守ることが出来る」⁸という建軍方針を思い出さずにはいられない。

大村の意志を継ぎ、明治3年の徴兵規則制定の中心人物であった山田は、もとより日本に徴兵制を導入するべきだとする考えを最も強く持っていた政府高官の一人である。『建白書』でも「人民必服ノ兵役」と述べているように、欧州視察後もその考えは何ら変わっていないことがわかる。ただ、『建白書』では、洋行によって得られた国際的知見、およびそこから相対化された日本の国情を踏まえた論点が示されている。それは、まず、「国家と法」・「法と軍隊」に関する事柄の中に表れている。山田はまず、「我国境ヲ出ル咫尺、人決シテ我国法ヲ以テ法トナスヘカラス律ヲ以テ律トナスヘカラス、万国ノ公法モ亦時アツテ照準トナスヘカラサル者アリ」と、国内は政府の法律による統治が徹底しているが、国際政治は時として国際法も及ばないアナーキーな状況であるという現実主義的な国際政治観を開陳する。そして、「法ト律トハ決シテ人ノ適意ナル者ナラス、常ニ人意ヲ抑制スル者ニシテ人間不便ノ具ナリ、故ニ人其抑制不便ノ苦ヲ脱セント欲スル素ヨリ其自然」であるため、「此（引用者註：不法行為の）時ニ当リ誰カ能ク之ヲ断決ス、兵ニ非ラスンハ決シテ之ヲ断スヘカラス」と、国内政治も国際政治も「法」を実効あるものにするものにするには実体としての強制力、すなわち武力の存在が必要不可欠であるにとらえているのである。もっとも、主権国家の内部で通用する国内法と主権国家間に存在する国際法は全く異質のものである。しかし、当時の日本に文明国標準を満たす国内法は未整備であり、加えて治外法権を列強に認めた不平等条約の効力下にあつて、日本政府の意思の貫徹には、対外的はもちろん対内的にも「武」が必要だった。

ただ、そのような環境にあっても「兵者其国体ト法律ニ依リ其権衡ヲ適宜ニシ設置スヘキ者ナリ」と、武力に対する法の優位を強調している。その上で、「我国体ト法律ヲ知り、各国古今ノ兵政ヲ斟酌シ、其利害損益ヲ比較シ、我国人民上ニ於テ其利益ノ在ル所以ヲ知り、而後之ヲ設置セスンハアルヘカラス」と、軍隊の存在意義についての人民教化の必要が述べられ、そこから、「於是コレヲ見レハ兵者独リ戦時ノ用ノミナラス実ニ治平ノ重器ナリ」との命題が導出されているのである。

また、『建白書』では、それまで兵部省当局者が必ずしも十分な配慮をしてこなかった重要な論点が示されている。それは、「兵役と国民」の関係に関するものである。『建白書』では、「人民ノ其土ニ生ル者ハ貴賤ノ別ナク必ラス皆兵役ニ服シ、各其国権ヲ保護シ而又其身所有ノ権ヲ固守シ決シテ他人ノ輕侮侵奪ヲ受クヘカラサルヲ以テス。人民能ク其理ヲ了解シ而後以テ徴集スヘシ。」と、まずは人々に兵役の意味について十分に理解させることが必要と説いている。徴兵令施行による血税騒動を考えたとき、慧眼というべきであろう。それらを踏まえて、山田は「強兵ノ基ハ採銃運動スルニアラス、国民一般都鄙ノ別ナク郷校ノ教育ヲ充分ニシ普ク人民ノ知識ヲシテ甲乙ナカラシムルニ在リ。教育ノ道如（レ点）此、兵以テ徴スヘシ。兵ヲ徴シ營ニ入ル、人已ニ普通ノ学問アリ、而テ又普通武事ヲ知ル」と、強い軍隊を建設するための即今の課題は、普通教育の普及によって国民の平均的知的水準を向上させることで、徴兵はその後に行われるべきとするのである。それと同じ文脈において、「人民必服ノ兵役ヲ金銭ニテ売買スル」という、徴兵令にもある代人料支弁者に対する兵役の免除についても、「欧州昔日ノ弊ナリ」と、切って捨てている。

また、『建白書』では、精強な軍隊を作る道として、士官養成の必要が強調されている。その論理は、人々に普通教育を施した後に優秀なものを数年間下士官学校に入れ、その卒業生をもって「数万ノ兵卒甘シテ之カ教導ニ服事ス」という。ただ、その下士官を教育するのは士官の役割であるため、先ずは士官を養成しなければならないとする。そして、「士官学校設置ノ方法并ニ地位ハ全軍士官ノ善悪全国人民ノ榮辱ニ関ス」とした上で、諸外国の士官学校の例を引きつつ、「当路ノ君子宜シク自他古今ノ経歴ヲ推考シ、万国ヲ斟酌シ将来ヲ想像スヘキ所ナリ」と、述べるのである。山田はこれら上・下士官の位置付けについて、「下士官ハ陸軍ノ縁ナリ、此縁堅牢ナラサレハ千万ノ兵モ寸用ヲ為ス能ハス」・「士官ハ陸軍ノ標柱ナリ、全軍ノ勝敗国家ノ安危国民ノ榮辱ニ関スル所ナリ」という巧みな比喻を用いながら表現しているが、軍学校の建設は山田が大村から受け継いだ国軍建設の要諦に位置づけられた施策であった。山田は大村の経綸を引き継ぎそれにヨーロッパでの知見を加えることで、自家薬籠中の物としたのである。

『建白書』の八つ目の項目、「目今我国ニ於テ急施ヲ要スル諸条件」でも、「趨末速功ノ患ヲ除キ、力ヲ基本ニ尽シ信実ヲ人民ニ厚クセシメン事ヲ。基本未タ立タズ其末治マル者アラス。国其体無クシテ国法アルヘカラス、国法ナクシテ其律アルヘカラス」というような言葉で立法精神が繰り返し強調される。そして、陸軍建設の方法も、明確な基本法から派生されるべきであって、ただ列強の軍隊を模するがごときはよろしく禁止されるべきと説く。そして、目下の課題は教育による人材育成であり、普通教育によって「全国ノ人民」をして、「国民」たらしめとする意識を涵養させるとともに学問・技術を身に付けさせることであると述べる。そこから徴兵を行えば、一般兵士の滞営は2～3カ月で十分であり、砲兵・工兵であっても4～5カ月で済むと指摘するのである。この数字は、日本の人口を3500万人として、平均年齢を33歳としたことから始まる計算をもとに根拠づけられている。かくして山田の主張は、山県にとっては「伏願クハ断然徴兵ノ挙ヲ延ヘ、此ノ間国中ノ警備ニ充ツル者各地下士官学校ノ人員ヲ以テシ、八年或ハ十年後ノ大成ヲ期シ、只其基本ニ尽カスルヲ以テ目今ノ務トシ、(中略)八年若シクハ十年ヲ経ハ、皇国壮年ノ人民悉ク文武ノ大概ヲ了解シ、遂ニ老少ノ別ナク文武ヲ知り続々絶ユルヲナキニ至ルヘシ。於是始テ兵卒ヲ徵募シ隊伍ニ編スヘシ」という徴兵令延期論となって前に立ちはだかれるものとなったのである。

山田の欧州での足跡

山田の西洋体験と『建白書』の関係であるが、同文書中に挙げられた国々の名を見ると、彼の印象に残ったのは新興国であるアメリカよりも歴史的経験の豊かな欧州諸国の軍事制度だったようである。そして、ヨーロッパ滞在中の山田の動静は、これまで、使節団の副使であった木戸孝允の日記に依る以外、史料がほとんどないとされてきた⁹。しかし、『木戸孝允日記』においても山田の動静は断片的にしか確認できず、山田の『建白書』を結果した彼の見聞の具体的内容を知ることとはできない。それを知る手だてとして、今日に至るまでその存在さえほとんど知られていない山田のヨーロッパ滞在中に彼の現地ガイドを務めた留学生渡六之助(正元)の滞仏時の日記がある¹⁰。山田に随行した記録はそれの第三輯(明治4年2月15日～同5年8月30日)と第四輯(明治5年9月1日～同6年12月31日)の中に確認できる。それによると渡がパリで山田と最初にあったのは明治5年3月11日である。以下、「漫遊日誌」と題された渡の日記の記述に従いつつ山田の見聞の足跡をたどってみたい。そこからは木戸の日記には記載されていない山田の具体的動静を知ることができる。

同（引用者註：明治四年三月） 十一日 晴

今夕肥後ノ林源介来リ語ル。今夜堀江来リテ山田少将着府ノ旨ヲ告ク。而シテ市ニ差向キノ要用有之之由ヲ云。故ニ直チニ出費。山田ノ旅宿ニ至ル。夜九字半刻也。対面談話不歇シテ夜ヲ徹シテ夜明ル。朝五字ヨリ同食シテ臥ス。今夜山田ヨリ兵部省ノ御書付ヲ請ル。

書中日、

渡六之介

今般山田陸軍少将為理事官欧米へ被差遣候ニ就テハ、佛國到着之上其諸国ヲ見テ御用向相勤可申候事

未十二月 兵部省 印章

猶又山縣兵部大輔ヨリノ一書アリ。文色同轍

今般山田少将同行ノ人

原田一道 岩下長十郎 富永冬樹 松村文介

これを見ると、渡に対する山田随行の命が兵部省から出されたのは明治4年の12月だったことが分かる。また、山田のパリ入りの同行者として原田の名前も見える。岩下、富永、松村も岩倉使節団の兵部省メンバーである。そして、以下に示すように、この日以降、渡は山田に毎日のように会い、また彼に同行して様々な場所を訪れることとなる。

同 十二日 晴

今日山田ノ旅宿ニ止マル。今夜帰覺。

同 十三日 晴

今朝山田ノ旅宿ニ往ク。今夕書肆ニ御買入ノ書籍ヲ檢ス。今夜山田ト語りテ夜ヲ徹ス。朝五字半刻ヨリ少ク臥ス。

同 十四日 小雨 日曜日也

今日山田ノ旅宿ニ止マル。堀江・駒留・今村・新納等来リ。今夜余帰覺ス。

同 十六日 曇

今夕山田ノ旅宿ニ往ク。檜崎・堀江ニ逢フ。今夜帰ル。

同 十七日 晴

今日學校ヲ退去シテ山田少将ノ旅宿ニ移ル 28 cours la Reine 戸次・檜崎
来ル。

同 十八日 晴。

今日午後王城内ニ往ク。山田・原田・岩下・松村・富永

同 二十三日 晴

今朝ミルマンノ覺ニ往ク。今日在宿。今夜小倉・満田・河野等来リ會ス。夫
ヨリ其旅宿ニ往ク。小室某ニ逢フ。十二字帰ル。山田・富永同行。

同 二十四日 晴 西曆五月一日也

今朝市街ニ用辯ニ出ル。今夜山田・岩下・富永・松村等同行。市中ニ往ク。

同 二十八日 曇 日曜日也

今日在宿。今夜山田同行、動物園散歩ス。

4月に入ると渡は体調を崩し、しばらく山田と会えていない。日記によると、
渡は同年4月4日に何かの流行病に罹ったようで、彼が公務に復帰するのは19
日に入ってからである。

同（四月） 十九日 曇

今日不快全ク癒ユ。今夜劇場ニ往ク。山田・岩下同行。

同 二十三日 晴

今午後佛國兵部省ニ至リ Dépôt de la guerre ノ局ニ至リ諸機器ヲ視ル。夕
刻帰ル。

山田・原田・富永・岩下等同行也。

同 二十四日 晴

今午後佛國ノ カピテーヌ・エーナン氏来リ談話後、同氏ノ誘引ニテ Hôtel
des invalides ニ至リ諸局見聞及諸処築城砲臺ノ横形ヲ見ル。夕刻帰ル。同
行山田・原田・檜崎・岩下等也。今夜山城屋和介ノ宅ニ至リ山田同行。

24日の日記には、山田一行の案内人として、エーナン大尉(Capitaine Aignan)
なる人物が出現する。「漫遊日誌」の中、「英難」や「エーニャン」という表記
でも他出するこの人物は、前記の木戸日記の明治6年1月18日の件に出てきた

「エンヤン」とも同一人物であると推測されることから、日本人応接担当のフランス陸軍士官だったものと思われる。

同 二十八日 晴

今日在宿。午後山田同行會社ニ往ク。今タカピテーン・エーナン氏来ル。

同 二十九日 晴曇

今午後一字ヨリ カピテーン・エーナン氏誘引也。モンバレリアンノ塞城ニ入り城中諸局及諸器械ヲ視ル。此塞城ノ主将コロ子ル官。

其塞城ノ兵

歩兵一レジマン、砲兵ニバッテリー、騎兵若干、城中火薬庫三ヶ処、塞砦ノ壁胸ヲ都テ三段ニ築ク、要害堅固ナリ。塞城中 十門ノ大砲及大弾丸ノ破却セルヲ視ル。是独逸兵此城引渡シ凱陣スルノ時咸ク破壊セルモノト云。夕刻五字過帰覺。同行山田・原田・岩下等也。

同 三十日 晴

カピテーン・エーナン氏ノ宅ニ往キ佛國陸軍制度上ノ質問ニ往ク。同行山田・岩下。

五月 朔日 晴今夜驟雨雷鳴

今午後カピテーン・エーニャン氏ニ軍事ノ質問ニ往ク。同行山田・岩下也。今夜山田同行市内ニ往ク。

山田らはエーナンの案内で、モン・バレリアンの要塞を見学しているほか、彼にフランス軍制について質問するため自宅を訪問するなどしている。そして、5月に入るとエーナン自ら軍事レクチャーのために彼らを訪問し始めているのである。7月末にエーナンが公務でスイスに調査出張に出かけるまでの間、山田らとエーナンが往来したその回数たるや、5月が20回、エーナンが避暑旅行に出かけた六月でも11回、7月に15回にまで及んでおり、まさに付きっきりで軍事制度の教授施されたことが確認できる。また、この間、エーナンの誘引などによって、山田らはイヴリー要塞などの稜堡式の陸上要塞、蒸気機関製造所、バル・ド・グラス陸軍病院、サン・シール陸軍士官学校を見学しているほか、フランス人の案内無しで「砲器製造所」なども見学している。これらによって、山田の西洋軍制理解は一層深化したはずである。

そして、次に示すように、7月15日にはパリにおいて記念すべき再会もあった。

七月十五日 曇 日曜日也

今夕陸軍兵學寮ノ生徒今佛國ニ留学ノ諸名ヲ招會シテ俱ニ夜食ス。

其人名

山田少将 原田教授 柏村 小坂 堀江 檜崎 戸次 船越 石丸 野村
小国 安達大田 岩下 富永等也。

同 十六日 晴

今午後兵學寮生徒群居ノ写真ヲ写ス。人名

山田・小坂・小國・野村・堀江・檜崎・戸次・船越・太田・岩下・富永・渡、
十一名。

今夜佛郎西陸軍士官ヲ市樓ニ招イテ俱ニ夜食シ、食竟ツテ後一同劇場ニ往ク。
其人名

commiandant chanoine

intendant Durand 不来也。

Capitaine d' Etat-major Aignan

Capitaine du Génie Viekkard

lieutenant Courtès

山田少将・原田教授・太田・岩下・富永・渡

山田は7月15日フランス滞在中の国費留学生と会食しているのである。そのメンバーを見ると、柏村庸之允以下がそこにいたことが分かる。本書第六章でも言及したように、彼らは明治3年10月に山田によって派遣された大阪兵學寮第一期フランス留学生らであり、パリでの彼らとの再会は山田にとっても感慨深いものであったに違いない。そして、翌日皆で撮影に及んだ記念写真とみられるものも現存している¹¹。

この後、山田は渡英し木戸らと会っているが、その期間は短い。木戸の日記¹²によると7月21日に山田は到着し、翌日は木戸に加えイギリス留学中の品川弥二郎、ベルリンから来た青木周蔵らとともに寺島宗則の旅寓を訪れている。山田は29日にも木戸と会っているものの、ほどなくその地を離れたようである。

「漫遊日誌」に戻ろう。

同（八月）三日 曇

今朝鮫島ノ宅ニ往キ談判シ帰ル。今夕佛蘭西國士官ピエオロール氏暇告ニ来ル。

別林往

今夜八字巴里府ガルジュノルノ蒸氣車ニ乗り 亭漏生別林ニ發ス。同行山田少

将・富永冬樹・太田徳三郎及余等也。

ここから、少なくとも山田は8月初めにはパリに戻っており、3日からベルリンに向かったことが分かる。

同 五日 晴暑 別林ノ暑気ハ巴里ニ一層ス

今日亨漏生兵ノ兵揃アリ。

今般魯西亜帝及奥地利帝杯別林府ニ来合シテ欧州制度ノ合議アリ。故ニ此レビュー兵揃ノ見聞アリ。今朝七字出荷馬車ニテ野外調練場ニ至ル。此地別林府ノ曠野也。此平地ニシテ四方山ヲ不見。

九字過キヨリ三兵四方ヨリ群リ出ル。各々本部ノ兵將衆也。其兵甲ノ上ニ白赤黒ノ毛ヲ冠セリ。赤アリ白アリ黒アリ各々其兵種及其隊伍ノ異ナルヲ表セリ。

十字過亨漏生王。魯西亜帝。奥地利帝及亨漏生太子並ニ馬上ニテ前驅二騎後騎数百名皆亨漏生國ノ將帥也ト云。此内各々白羽ノ飾リヲ甲上ニ冠ケリ。此内萌黄色ノ鳥羽ヲ冠セルアリ。此分ハ奥地利將帥後陣ニ列セル者ト云。

三帝此三兵列陣ノ中ヲ通行シテ其威儀堂々タリ。亨漏生國ノ女王モ亦随行セリ。(後略)

山田一行が8月5日に見たものは、プロイセン・ロシア・オーストリア三国軍隊による軍事パレードである。普仏戦争終結後、フランスの対独復讐を封じるため後にビスマルク体制と呼ばれる複雑な同盟関係を構築していったが、その手始めが独・露・奥三国による同盟の模索であった。「三帝同盟」が成立する前年に行われたこの三国による軍事パフォーマンスは、もとよりビスマルクによって企画・演出されたものであり、渡も強い関心をもってその光景を観察している。

同 六日 晴暑 今夕驟雨 日曜日也

今朝 Brandt, minister prenipotencher ノ宅ニ往キ明日兵揃戦争ノ一見アルヲ以テ其免許状依頼ノ為山田ト同行ス。今午前別林外務省ニ在リ Thile 氏ヲ訪フテ不遇シテ帰ル。(後略)

同 七日 晴

今朝八字旅宿ヨリ馬車ニ乗リテ今日ノ戦争調練ヲ見ニ往ク。

戦争調練第十字ヨリ始マル。三兵各其位置ニ就キ、先ツ始メニ砲戦ヲ始ム。次ニ先鋒ノ歩兵小銃ヲ連發ス。時々騎兵ヲ左翼ニ巡シ次ニ砲隊之ニ続イテ其敵ノ右脇ヲ討ツ。勢ニ乗シテ中央ノ歩卒進撃ス。先鋒ノ豫備之レニ嗣ク。次ニ後

部ノ豫備亦追々進テ入ル。(中略)

今日同行ノ人、二馬ノ車四輛、伏見三ツノ宮（伏見満宮、北白川能久親王）。山田少将。田中（不二麿）文部大丞。高崎（正風）中議官。青木周蔵。品川弥二郎。桂太郎。岩倉公子。鷹司公子。田坂虎之助。山本十介。鳶地黙雷。太田徳三郎。富永冬樹。駒留良蔵。其他二三名。(後略)

山田一行はパレード見物の翌日には三国合同軍事演習を見物している。演習の内容は歩兵・砲兵・騎兵による三兵の統合運用によるものであった。この日の同行者を見ると、かつて檜崎頼三らとともに横浜語学所に入り国費留学を夢見ながら中途退学して私費留学を果たした桂太郎の名もみえる。こうして、軍事イベントを見物し終えた山田は同月 16 日より、専門的な兵制調査を始めている。

同 十六日 晴

今夕五字半頃ヨリ General major, Paris 宅ニ至リ享漏生兵制ノ問答シテ帰ル。同行山田少将・太田徳三郎。

今夜青木・黒川ノ宅ニ往ク。山田・太田同行。

同 十七日 晴

今朝十字ヨリ Ahrens 氏ノ誘引ニテ別林ノ諸鑄造、器械処及傳信局ニ往ク。夕刻四字帰ル。山田・原田・太田同行。

同 十八日 晴

今朝十字ヨリ ハーレンス同行ニテ別林ノ諸製造局ニ往キ蒸気車機関、蒸気船ノ器械等ヲ見物ス。山田・原田・富永・太田等也。午後市楼ニ同食シ帰ル。今夜 General major Paris ノ宅ニ陸軍制度質問ニ往ク。

これによると、山田はドイツではパリス少将に就いて同国の軍制に関するレクチャーを受けている。また諸施設への案内役を担ったのがアーレンズなる人物であった。パリス少将宅へはその後も 20・21 日にも「軍事質問」に訪れており、アーレンズの「誘引」による施設見学については、22 日に「大砲器械処」、25 日には「射習校」に行ったとの記録もある。

同 二十七日 晴 日曜日也

今朝享漏生ノ陸軍省ニ往キ ミニストル・ドラデール。ローン氏ヲ訪フニ不在ニシテ不遇。帰路佐々木司法太輔ノ宿ヲ訪フ。山田少将同行。

今夕五字 von Brrandt, minister ^(ママ) à le general Paris ノ二員ヲ夜食ニ招キ市樓ニ饗應シテ別ル。同生

山田少将・青木周蔵・品川弥二郎・富永冬樹・太田徳三郎

同 二十九日 曇

今朝出荷別林府ノ兵隊屯集所及病院ニ往ク。

今夜六字セネラル・パリノ宅ニ往ク。

同 三十日 晴

今朝写真局ニ往キ像ヲ写ス。山田・太田同行。夫ヨリ別林府ノ禽獣園ニ往ク。

最終的に会えたかどうかは不明であるものの、プロイセンの陸軍大臣として軍制改革に辣腕をふるったローンの名前も見えて取れる。

「漫遊日誌」の第3輯は同年8月末までであるが、最後の二日間の記録は以上のようなものである。山田らが変わらず熱心に調査に励んでいる様子が見て取れる。

九月一日 晴

今朝九字ヨリ孝人 Aharens 誘引シテ、別林ノ casernes 砲兵・歩兵ノ屯集所江往ク。

最初砲兵ノ屯集所ニ往ク（中略）此屯集処ノ主将 le colonel von Welder 氏也。此人出テ熟ニ語ル。次ニ士官一人誘引シテ諸事ヲ講キ明ス。

夫ヨリ歩兵屯集処ニ往ク。一聯隊ノ屯集所也。同ク士官出テ誘引ス。

兵隊衣服ノ製造処ニ至リ其仕方ヲ聞クニ、兵卒ノ服、大上着十ヶ年ヲ用ユ。常衣二ヶ年、股引十四ヶ月間ヲ用ユト云。

夫ヨリ鞆ノ製造処ニ至ル、沓ニ二通りアリ。一種ハ膝下ノ半長沓、一ハ短沓屯集処用他ト云。沓ハ用ユルニ期限ナク脩覆シテ用ユルト云。（中略）

帰路別林ノ市中ニ魚鳥蛇類ノ博覧処ニ往ク。山田少将・太田徳三郎同行。

今夜六字 General Paris 氏ノ宅ニ往キ孝國兵制ノ質問ス。

山田らは9月1日、アーレンズの誘引で騎兵の屯集所、衣類や諸兵器の貯蔵局、営倉の見学に出かけており、この後7日までベルリンで過ごしている。このように、山田の同地での活動は概してパリス少将への質問とアーレンズの誘引による諸施設の見学で成り立っているといえる。8日、山田らはベルリンを離れ、九日にエッセンに入った。一大兵器会社を築いたアルフレート・クルップの兵器工場の見学のためである。

同 十三日 朝晴後雨

今朝九時旅宿ヲ立ツ、ステーションニテ双方ニ別ル。

山田・富永・太田ハ俱ニ瑞士國ヘ往ク。余ハ巴里府ニ帰ル。(後略)

山田は、そこからスイスへと旅立ち、一方の渡はパリへと戻って、10月25日に受験するサン・シール陸軍学校の入学試験に備えることとなった。10月14日から受験日までは再びエーナンについて学業に励んでおり、その日数は24回を数える。

同(一〇月)二十四日 曇 日曜日

今日市中ニ出ル。午後小阪・船越・山田等来リ語ル。(後略)

同二十五日 曇 雨

今朝九時蒸氣車ニテ Ecole de St Cyr 陸軍兵學校ニ往キ入校ノ學事試験ニ行ク。十字半より試験始マリ。

夕刻四字過キ相濟ミ帰ル。今夜七字也。

今夜山田少将来リテ ホンテンブロー ノ戸次ヨリ帰ルト云。

今朝九時過キ戸次正三郎親任死去セリ。肺病也。

スイスに向かった山田が、再びパリに戻って渡と面会したのは10月24日である。そして、翌日士官学校受験を終えた渡に山田が告げたのは、彼が明治3年10月に送り出した10名の大坂兵学寮第一期フランス留学生の一人、戸次正三郎の死であった。戸次は旧柳川藩出身の嘉永元(1848)年生まれで、「漫遊日誌」にもしばしば登場する人物である。戸次の遺体は留学生らの手によって翌日手厚く葬られた。

同二十七日 晴

(前略) 今夜食後、山田少将ノ宿ヲ訪フニ去今夕英國ニ往ケリト云。

十一月一日 曇 日曜日也

今夕山田少将巴里ニ着。其宿ヲ訪フ。

同 四日 曇

今夕山田少将瑞西國ニ帰ルヲ送りテ カル ニ別ル。

今夜佛國兵部省ヨリノ書翰来リ、今次ノ試験相濟直ニ兵學寮入校ヲ許サルノ

旨ヲ言来ル（後略）

山田は10月27日から数日間パリを離れ英国に滞在した後、11月4日からは再びパリからスイスへと向かっている。

改暦

神武天皇即位

二千五百三十三年

明治第六年 酉

正月 一日 西暦一千八百七十三年第一月一日也

巴里府ノ旅宿山田少将ノ宿ニ同居ス。

二月 一日 熱ヲ病ンテ平臥ス。

今夕山田少将来訪。今夜瑞西國ニ帰ルト云。大田徳三郎同行。

太陽暦が採用された明治6年の元旦、山田はパリにあつて渡と新年を祝しているが、一ヶ月の滞在の後、大田徳三郎を伴って再びスイスへと出発している。この後、約三ヶ月もの間、山田に関する記述は「漫遊日誌」から消える。

同（五月） 六日 医来ル。今朝散歩。午後出ル。

今夕山田少将着迎ノ由ニ而来顧。

同 七日 今朝植物園ニ往ク。

今夜山田少将巴里府ヲ發シ帰朝ノ筈、余今夕旅宿ニ送別スルノ約ヲセシカ不快ニテ不果。

山田は、5月6日にパリに入り、翌日帰朝の途に着いたことが分かる。

影響を与えたと考えられる渡の言説

渡が留学生としてパリに入った当時、フランスはナポレオン3世の帝政末期であり、普仏関係は一触発の状況であった。学費も尽きていた彼は、戦乱勃発時にはその観戦日誌を作成し帰朝の土産にしようと考えていた。こうして戦端が開かれるや彼はパリにおいて籠城の一部始終を記録したのである。この記録が、明治4年に軍事視察のためにパリに入った大山巖や品川弥二郎らの目に留まった。かくして彼らに預けられた八冊のノートは、兵部省に提出され、同年6月に『法普戦争誌略』との書名で出版されたのである¹³。同書は8巻に及ぶ

大著であるとともに、軍事的視点にとどまらず、政治的・経済的・社会的視点からも普仏戦争全容を分析した同時代の記録である。このような実績によって、彼は国費留学生に抜擢されたのである¹⁴。

これまで見てきたように、明治5年3月から渡は山田の軍制調査の「ガイド」を務めることとなるが、そこでなされたであろう渡の多方面にわたる普仏戦争についての解説は、山田が知見を広げるのに大いに役立ったはずである。『法普戦争誌略』ではフランス軍敗北の要因について、次の五点を挙げて総括している。

仁和を得ずして其軍を擅^{ほい}まゝにす。一失なり。

敵を侮^{おご}つて其傲^{おご}る。二失也。

将帥の選挙を誤りて、其令良からず。三失也。

兵の成算を失して嗣^{つぎ}ぐに兵・器俱に乏し。四失也。

間諜を用ひずして、敵の機を察すること能はず。五失なり。¹⁵

ここで、敗因の第一に挙げられた「人和」については、「仏国人民の制御し難きことは古来より能く人の知る処なり。是人民常に廟堂を蔑視し、草莽激動して屢々其国体を変換する宿弊あればなり」¹⁶と付言している。そして、これら分析を通じて渡が持つにいたった戦争概念について、彼は次のような言葉で同書を結んでいる。

仏人の巴里府城に籠る其兵都て七十万及城郭外に配備する大砲都て一千六百五十門、而して其銃砲固より奇巧を極め、其城郭の堅固なる万国無双とも謂つべし。然りと雖も一百三十余日の籠城後、終に其食を尽して出でゝ和を乞ふに畢りぬ。余之を以て更に知る、故人の所謂兵の勝敗固より人に在つて而して兵器に非ざる事を。嗟又察せずんばある可からざる也

一方、山田が帰国後提出した『建白書』では、「兵ヲ徴スルヤ、苗ニ容貌ヲ強兵ニ模擬シ隊伍ニ編シ銃砲ヲ採リ敵前ニ進マシムル而已ヲ以テ本務トスヘカラス、人民一般ノ知識敵兵ニ超越スルヲ以テ最要トス」とし、「器械火薬モ亦国家ノ安危ニ関ス。近世ノ戦ニ於テ最モ其勝敗ニ係ル大ナリ」と述べつつも結局は国防の意味を十分に理解した「人民一般」をつくるのが大切と述べていた。これは偶然の一致ではあるまい。

では、渡は、滞欧中の山田に対してどのような政治観を披瀝したのであろうか。これまで知られていなかった貴重な史料が渡家に残る。それは、山田の欧州滞在中、明治6年2月6日に遣欧使節の岩倉具視全権大使に提出された渡の

「上書」である。同日の「漫遊日誌」は、提出の様子を次のように伝えている。

同（二月） 六日 全（病ム。） 全（医来ル。）

今日特命全権大使岩倉公江上書ス。尊臥中ノ故ヲ以テ井上毅ヲ頼ム。

渡は、岩倉に対する上書を井上毅に頼んで提出したとある。「漫遊日誌」に「友人」と付記してしばしば登場する井上は、幕末期には共に長崎に留学したこともあり、二人は刎頸の友であった。

以下に渡の「上書」の全文を挙げたい。

於佛国巴里 日本特命全権大使
岩倉具視公、建白書
渡六之介

軍生渡六之介多罪ヲ不顧謹テ建言仕候。伏シテ思ヘラク古今國ノ興廢變換時世ノ因テ移リ勢ヒノ因テ然ラシムル、往々人力ノ能クシ難キモノアリト雖モ之ヲ為ス、固ヨリ人ニアリ勢ヒモ亦人ニ因テ行ハル。其職ニ在ルモノ宜シク之ヲ深慮セサル可カラス。伏シテ奉恐察候ニ、今大臣閣下特命大使ノ聖任ニ膺リ、國家柱石ノ諸卿其副使トシ、命ヲ歐米諸國ニ致ス。蓋シーニハー新以来ノ交際ヲ厚クシ、天皇陛下ノ高德ヲ四方ニ布キ知ラシメ、二ニハ宇内萬邦其國體形勢興廢事情ノ因テ出ル所ヲ親シク臨ンテ之ヲ視、其人情民俗ヲ深ク觀察シ其求メテ取ルヘキモノト、其依テ行フヘキモノヲ洞鑒シ、將來我本邦不拔ノ基礎ヲ立テサセラレンカ為ニ可有之候。若シ然ラハ、今此米歐各国政府ノ方向諸種ニ出テテ其體質同シカラス。其得失ノ間深ク御辨晰被為在、一定ノ国是ヲ以テ我カ国民ニ其方向ヲ布キ知ラシメスレハ、人民徒々ニ開化ノ風ニ浴シ、其進ミ取ルニ度ナク、頻リニ新政新法ヲ好ンテ、往々漸次ニ變遷シ、遂イニ不測ノ患ヲ醸サントスルニ至ル可シ。今次米歐御一周ノ上ハ、国是一定不易ノ御制度被為立度、頻リニ焦心奉懇願候。前文不測ノ患ト云ハ他ナシ。多年ノ後、我人民異説ヲ主張シニ派ニ分裂シ、二途ニ背馳シ、勢ヒ遂ニ廟堂ニ通ツテ制ス可カラサルニ至リ、輾轉測ル可カラサルノ大患ヲ醸シ、其變態ノ不可言ニ至ル可シ。其主張スルモノ、即チ共和制度ナリ。其分裂ヲ為スモノ、即チ現今米歐諸州ノ生徒ナリ。抑々一新以来内國ノ人材咸ク出テ廟堂ニ聚メ、開化ノ進歩逐日増加シ、今日ノ勢ヲ以テ見レハ、明日ノ進歩ノ如何ナルヲ量ル可カラス。其勢ヒ益々人材ヲ育シ、益々萬邦ノ事情ニ通セシメサルヲ得ス。其人即チ目今歐米諸洲ノ留学生也。今廟堂ノ深ク後軍ヲ倚頼スルモノ、即チ此生徒ナリ。然ルニ此生徒欧州ニ在ル

モノハ概ネ立君政體ノ基ヒヲ固メントシ、米國ニ在ルモノハ大イニ共和ノ國風ニ慣習スルノ趣アリ。中ニ甚シキハ國政ヲ立ル、共和ノ外他制ナキヲ信シ、其各地國土ノ成質及世道人心ノ由テ出ル處ノ異ナルト、其國體ノ趣キノ同カラサルヲ顧ミス、只管ニ之ヲ仰望主張スルモノアルニ至ル。多年ノ後、諸洲ノ生徒成業帰朝シテ、各々其所見ヲ述ル時ハ、此共和ノ說廣大公平ニシテ能ク人率ニ適シ、能ク下民ノ心ヲ攬リ其徒ヲ聚メ、黨ヲ結フ、果シテ易ナル可シ。其蹤跡歷々歐洲各國ニ著ハレ、各國政府之カ為ニ多少ノ艱危ヲ受ケ、殊ニ佛蘭西國ニ至ツテ碩學大家之カ首唱トナリ一時全國ニ波及シ、那破倫機ニ乗シテ突起シ、内外ノ乱ヲ構ヘ、其流レ人心分裂シテ互ニ相仇視シ、上ニ一定ノ政府ナリ下ニ共同ノ公論ナリ、今日ニ至リ終ニ混一治平ノ期ナキニ至ル。獨リ旧王家ノ禍ノミニ非ラス。其害毒實ニ全國人民ニ被ル。洪水猛獸モ以テ論ヲ為スニ足ラス。鑒ミサル可ケン哉。

夫レ共和制ノ物タルヤ固ヨリ其國ノ成質ニ因ル。米利堅ノ如キハ元々諸洲ノ人民雜集群居シテ而シテ一國ヲ為ス。其獨立不羈ノ國トナルノ日、假令華盛頓氏、一世ノ英傑タリト雖モ立テ帝王トナルヘキ謂ハレナシ。合衆共和ハ固ヨリ其所ナリ。佛蘭西國ノ如キ、久シク王族ヲ奉シ、俄カニ共和制ヲ立テ、快ヲ一時ニ取ルモ、終イニ永久ニ行ハル可カラス、亦固ヨリ其國ノ質ニ因ルナリ。然レトモ得失ノ間辨晰或ハ難シ。歐洲各邦大家名臣亦往々其說ニ耽ケリ、流レテ反ルコトヲ知ラス。其大患ヲ釀シ成スニ至ツテハ、我國昔日ノ所謂攘夷家ノ一朝ノ見ヲ以テ暴動スルノ類ニ非ス。其學識高シテ其見聞廣ク、其說能ク民心ニ協フテ、加フルニ外人ノ陰ニ之カ扶クルモノアリ、内外相應ス。其禍實ニ計ル可カラス。其外人ノ扶クルト云ハ他ナシ。即チ米利堅也。始メ米利堅、我日本ヲ勸メテ開港セシメタルノ故ヲ以テ、深ク我國ニ親ヲ結ヒ、其交情ヲ厚クシテ、我人心ヲ攬ル。而シテ我日本人民概ネ米國ヲ信スル、遙カニ英佛等ノ右ニ出ツ。其上國土ノ相近キ渡海ノ易キ逐日士商相往來スル、昔日九州人ノ京摂ニ於ケルヨリモ猶易シ。臣竊ニ之ヲ驗スルニ、我國久シク鎖國ノ民始メテ海外ニ渡リ米國ノ地ニ入ルモノ、或ハ其政制ニ服シ、或ハ其宗教ヲ羨ミ、一見一聞乍チ感シ、乍チ信シ、遂イニ共和政下ノ民タランコトヲ望ムノ色アルニ至ル。一旦若シ我國ニ此論ヲ主張スルモノアラハ、米國必ス竊カニ應援シテ其徒ヲ扶ク可シ。是同氣相引キ同派ノ蔓延ヲ計ル所以ニシテ、殊ニ共和論家ノ常習タリ。現今歐米各邦ノ人民共和論ヲ唱フル者、皆ナ聲氣相通シ約シテ兄弟タリ。一旦事アリ、國ノ自它ヲ問ハスカヲ傾ケテ相援ク、其事迹一昨年佛蘭西國ノ共和制ヲ立ツルノ日、米利堅ノ陰ニ扶助スルノ厚キニ因テ尤看ル可キナリ。夫レ内民心ヲ動カシ、外與國ヲ引ク事、若シ此ニ至ル、勢ヒ已ニ為シ難シ。是臣カ今日ニ於テ焦心熱思シテ未然ノ事ヲ論シ、未形ノ禍ヲ述ヘ、狂暴多言ノ詭ヲ顧ミサル所以ナリ。今其禍ヲ未然ニ制ス可キモノ他ナシ。朝權ヲ固クスルニ在リ。所謂朝權ナ

ルモノハ、其国体ヲ意シテ、国是ヲ確守シ、紀綱立テ、廟堂固有ノ嚴ヲ修メ、文武ヲ維持シ、官民ヲ統御スルナリ。抑々今日国政法度ノ採擇ニ供スヘキモノ、欧州中二三ノ強国也。然レトモ英国ハ立君ノ名アリト雖モ、其实政議院ニ在テ王權立タス。我ノ求メテ學フヘキ国体ニ非ラス。佛国ハ假リニ共和ノ形チヲ為ス。然ラハ其取ルヘキモノ獨リ孛漏生アルノミ。孛漏生、新造ノ国ヲ以テ上ニ議論ノ弊ナク、下ニ驕汰ノ患ナク、君權立テ、紀綱正シ。今此ニ因テ其事實及原由ヲ研窮シ、其宜キヲ斟酌ス。必ス取ルヘキモノ多シ。伏テ思フ、朝廷遠謀豫備ノ国是御定策被為在度。□□至願、臣其分ヲ知ラス。區々ノ餘リ萬□ヲ冒シテ、謹テ上言仕候。其措置方法ノ詳ナルニ至ツテハ自ラ朝廷帷幄ノ中ニアリ、臣力敢テ贅言ス可カラサルモノナリ。恐懼敬白再拜¹⁷

この文書は、外地に暮らす当時の留学生が日本の欧化政策に対しどのような意見をもっていたかを知る上でも注目すべきいくつかの点がある。本文では、岩倉使節団の目的を将来日本が「不拔ノ基礎」を立てる基礎固めのために諸外国の歴史や国情を調査するものであるはずとし、そこから、それぞれ異なる欧米各国の政体を分別してみる必要が述べられる。渡は当時の日本の急速な欧化政策のありようについて情報を持っていたと思われ、急進的な明治政府の姿勢に対し強く警鐘を鳴らしている。政府が国民に対して明確な「国是」を示さない限り、人民はそれぞれ区々にヨーロッパの諸制度を取り入れようとして、遂には「不測ノ患」を醸すことになるであろうというのである。では、渡のいう「患」とは何か。彼によるとそれは「共和制度」であるという。共和制度は政府部内をいたずらに分断させる政治状況を生み、一定であるべき政府の方向性を展転させることとなるというのである。

そして、注目すべきは、そのような国論の分裂を招くものこそ、「現今欧米諸州ノ生徒」としている点である。新政府発足後、明治政府は多くの留学生を欧米列強に送り出してきた。しかし、渡が見るところ、欧州留学組はおおむね君主制の国体を重視するのに対し、アメリカ留学組は共和制に傾倒するものが多いという。しかしながら、各国には歴史も地理も異なっており、それを無視した制度の輸入は危険だというのである。彼は、自らが留学の拠点としたフランスが君主国でありながら革命によって共和制を導入した歴史を紹介しつつ、「其害毒実ニ全国人民ニ被ル」と述べ、同じく君主国である日本が共和制を導入する事の不可を論じている。

そして、渡は日本人がアメリカに親近感を抱くのは英仏に対してよりもはるかに凌駕しており、もし日本で共和制導入の動きがあるならば必ずやアメリカがそれに呼応してそれを援助するであろうと、フランス革命のときのアメリカの支援を引き合いに、警鐘を鳴らしている。

では、そのような事態を避けるためには何が必要か。渡の論は明快である。曰く、「朝権を固クスルニ在リ」と。そして朝権とは「国体」を意味し、「国是ヲ確守シ、紀綱立テ、廟堂固有ノ嚴ヲ修メ、文武ヲ維持シ、官民ヲ統御スル」ことであると述べている。

このような渡の主張は、山田にも少なからざる影響を与えたと思われる。山田の『建白書』中に渡「上書」の論に対応する箇所を確認できる。渡は欧州の諸制度を無批判に受容することの危険を訴えていたが、山田は『建白書』の第八項において、「我朝維新以降幕府其職ヲ奉還シ、天兵逆賊ヲ討滅シ諸侯国上ヲ奉返スル等ノ挙、中外古今歴史上未曾有ノ盛事ニシテ万国挙テ禰感スル所ナリ。然リ而祖宗千年ノ国典ヲ改革シ古来慣習ノ礼節ヲ廃シ、事物道理ノ其当否ヲ知ラスシテ妄ニ之ヲ興廃スル等、又中外古今未曾有ノ珍事ニシテ万国挙テ怪視スル所ナリ¹⁸」と、当時の政府が進めていた総体欧化主義政策に対し外国から見ても不可解な有様になっていると指摘し、「伏願クハ自今速効ノ患ヲ除キ、力ヲ基本ニ尽シ、信実ヲ人民ニ厚クセシメンコトヲ」と、性急で無原則な改革を批判している。

渡はまた、外国の制度の選択的摂取の必要は述べつつも、その場合でもまず日本の歴史や地理的特性に根ざした「国是」・「国体」を確立するべきであると訴えており、我が国の場合それは君主制であり、「朝権ヲ固クスル」ことであると主張していた。この問題についても、山田の『建白書』第八項に次のようにある。「伏願クハ、我朝固有ノ国体ト皇祖天壤無窮ヲ固守シ、国法ヲ定メ欧米諸国ノ国法ト我人民慣習ノ法トヲ斟酌シ、国法ノ条目ヲ審擬シ国法ニ依リ以テ国律ヲ確定シ、普ク人民ニ教示シ、数年ヲ経人民ノ能ク真理ヲ了解スルヲ待チ漸々事実ニ施行センコトヲ」。

このように、山田の『建白書』と、渡の上書の内容は、無原則な急進的欧化政策への批判、国体論を淵源とする「国家と法」・「法と軍隊」の関係性の自覚と強調といった、論の根幹部分において、両者は通底していることがわかる。渡は日本が今後手本とすべき国として、唯一プロイセンあるのみと主張していたが、山田『建白書』も、最後の部分に「普国軍制ノ盛大ヲ致スヤ、千八百八年ヨリ千八百十二年之間ニ於テ、ゼネラル・ボンス・シャルンホルスト氏旧制ヲ一変シ鴻基ヲ堅立セリ」と、プロイセンにおけるシャルンホルストの軍制改革が賞賛されている。しかも、山田は「シャルンホルスト氏ノ力能ク六十一年ノ久ニ堪ユヘカラス（中略）然ルニ能ク旧基ヲ守リ敢テ変換ナキ所以ノ者ハ、国法有リ能ク之レヲ維持シ、数ミニストル」と、制度を確立して以降は、為政者が法によってそれを維持してゆくことが重要であると指摘することも忘れていない。

おわりに

これまで見てきたように、岩倉使節団の理事官としての山田の欧州体験において、随行者渡正元の果たした役割は極めて大きなものがあった。山田の帰朝は明治6年6月24日のことであったが、渡はその後もサン・シール陸軍学校で学び、明治7年7月8日に帰国した。渡の日記によると、両者の頻繁な往来は帰国後も続いている。また、山田は、明治10年の西南戦争に際しては、「別働第2旅団長官」（後、別働第1～4旅団「総轄」）を拝命し、西郷軍の背後を衝くいわゆる衝背作戦を実行しているが、実はこのとき渡も別働第3旅団会計部長として共に出征している。

山田の後半生における業績として、初代司法大臣に就任し様々な法律の起草を行なったことなどはよく知られている。また、明治21年に皇典講究所の所長に就任し、国典の研究を通じて、日本の「国体」の明徴を積極的に推進したことも有名である。あるいは、明治22年に、日本古来の法律と外国の法律の教育・研究機関として、日本大学の前身となる日本法律学校を皇典講究所内に設置したことなどは、日本大学のその後の隆盛と共に山田顕義の名を最も世に知らしめたといえるかもしれない。また、明治23年には同じく皇典講究所内に国学の研究・神職の養成を目的とした、國學院大學の前身である國學院を設置している。

これらの業績と、国体・国法・教育の確立を強く訴えた明治6年の山田顕義『建白書』との連関を考えると、『建白書』は単なる理事官報告書としての意味を超えて、彼の後半生を動機付けたものとして我々に迫ってくる。その意味においても、山田における渡との邂逅の意味は改めて重視されなければならぬ。

本稿の執筆にあたり、山田顕義の欧州滞在に関する新史料にたどり着くことができたのは、日本仏学史学会の田中隆二教授の研究に負うところが多い。残念ながら先生には御存命中にお目に掛かることができなかったが、ご令室田中律子氏から先生の未定稿の原稿など多くの貴重な資料をご恵与いただいた。また、律子氏のご紹介で渡正元の御子孫である渡洋二郎氏にお目に掛かる機会を得、洋二郎氏からは未公開の渡正元「上書」の複写をご恵贈いただくとともに、「漫遊日誌」とあわせて本稿での使用を快諾していただいた。記して謝意を表したい。

なお、本研究は「平成29年度明治150年記念 後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業」の助成を受けたものである。

¹ 吉野作造編『明治文化全集 23 軍事編・交通編』（日本評論社、1930年）3頁。

² たとえば徳富蘇峰は次のように論じている。「当時に於ては、恐らくはこれ以上の有力にして、且つ有効なる反対論は無かつたであらう。而して大村の衣鉢を相続したる山田の声望と、陸軍部内に於ける大村の旧門下という可き僚吏にして曾我祐準、小澤武雄其外山田の味方たるもの寡からざるに於てをやだ。山田の立場は、実に困難であつたと云はねばならぬ」(徳富猪一郎『近世日本国民史 83』【近世日本国民史刊行会、1961年】274頁)。また、伊藤正徳によれば次の通りである。「先ず合理的とも考えられる反対論が、政府部内の専門家から提唱された。それは、兵部大丞(引用者註：正確にはこのとき兵部省はすでになく、山田には陸軍少将の肩書のみがあった)―軍務局長に相当する―山田顕義(陸軍少将)の議論を代表的のものとする。特に山田は官命を帯びて欧州の兵制を研究して帰朝した新知識であり、その建白の内容は概略次のようなものであった。(中略)即ち徴兵漸進論であり、財政的見地からも義務心を基調とする上からも、また反対論を和らげる上からも、賢明な方法と思われ、政府の中心人物であつた木戸孝允も、中途からこの説に傾いたほどであつた」(伊藤正徳『軍閥興亡史 I』【文芸春秋新社、1963年】38頁)など。

³ 福澤諭吉『福澤諭吉著作集 第3巻』(慶応大学出版会、2002年)42頁。

⁴ 兵部省は山田が洋行中の明治五年二月二七日に廃止され、陸軍省・海軍省が設置されていた。山田が帰国した際、陸軍卿には山田有朋が就いており、海軍卿は空席で同大輔に勝安房があつた。

⁵ 日本大学編『山田顕義伝』(日本大学、1963年)451頁。

⁶ 渡洋二郎氏所蔵「渡正元履歴」。

⁷ 吉野『明治文化全集 二三 軍事編・交通編』15～18頁。

⁸ 村田峰次郎『大村益次郎先生事績』(マツノ書店、2001年、但し復刻原本は1919年)203～204頁。

⁹ 三宅守常「理事官山田顕義の欧州随員考」(日本大学総合科学研究所編刊『山田顕義-人と思想』(1992年)408頁。

¹⁰ 田中隆二「渡正元『漫游日誌』について」(『仏蘭西学研究』第30号、2000年9月)4頁によると、「漫游日誌」という表題がついたそれは、渡が明治二年に英国に渡航した時から同7年に帰国するまで記録していた日記である。したがって時期としては、『巴里籠城日誌』と重なる部分もあるが、これとは別に控えていたものである。「漫游日誌」は田中氏が渡の令孫赤木千鶴子氏より教示を受けるまで、縁者以外には知られていなかった。現在「漫游日誌」の原本は千鶴子氏の長男勝正氏が所蔵している。

なお、「漫游日誌」は第1輯から第5輯まであり、第五輯の途中からは帰国後の記録となっている。「日誌」は全部で第7輯までであるが、第6・7輯は全編が帰国後の記録なので「漫游日誌」ではなく「記事」と題されている。

¹¹ 萩博物館所蔵。

¹² 日本史籍協会編『木戸孝允日記(二)』(マツノ書店、1996年)217～224頁。

¹³ 渡正元『巴里籠城日誌』(東亜堂書房、1914)は、同書の復刊である。

¹⁴ 田中隆二「渡正元『漫游日誌』について」5頁。

¹⁵ 渡正元『巴里籠城日誌』250～251頁。

¹⁶ 同右、251頁。

¹⁷ 渡洋二郎氏所蔵「於佛国巴里 日本特命全権大使岩倉具視公 建白書」

¹⁸ 吉野『明治文化全集 23 軍事編・交通編』19頁。